

現代の生活デザイン

レポート
第1回2014.
9.27
[sat]農を生かした
新たな都市型ライフスタイル

実践女子大学 生活科学部は、日野キャンパスを拠点に食物や栄養、健康、衣服、もの、住まい、ライフスタイル、幼児・保育に関する研究と教育を展開しています。本講座では、生活科学部が擁する4つの学科が衣食住育等の生活のデザイン、あるいは生活を取り巻く環境や支援等のデザインを題材に、現代に生きる私たちの生活をより豊かにするための提案や実践を考えます。

第1回となる今回は、新設の現代生活学科の主催により、暮らしや科学技術など多様な視点から「農」を見つめ、それを採り入れたライフスタイルのあり方を探りました。



進行：野津 喬氏

実践女子大学 生活科学部 現代生活学科 准教授

ゲストからの話題提供

農に深い関わりを持つゲストをお招きし、行政や生産者などそれぞれの立場から、都市や日野における農業の現状と課題についてお話をいただきました。

1. 都市農業の
新たな展開と可能性

三善 浩二氏

農林水産省
関東農政局農村振興課
課長

都市農業は、下記のように多様な役割を担っています。

- (1) 新鮮で安全な農産物の供給
- (2) 身近な農業体験・交流活動の場の提供
- (3) 災害時の防災空間の確保
- (4) 安らぎや潤いをもたらす緑地空間の提供
- (5) 国土・環境の保全
- (6) 都市住民の農業への理解の醸成

都市住民の中では「農」のある暮らしを楽しみたい、という要望が拡大し、福祉農園へのニーズも高まっています。こうした状況を背景に、都市やその近接地域を対象として農林水産省では「『農』のある暮らしづくり交付金」施策を通じ、交流農園や福

祉農園の整備を重点的に推進しています。また、「農」への理解深化に向けた取り組みの一環として食育も後押ししています。

一方、農業における技術の動向を見ますと、現在、日本国内でも植物工場の整備が広がりつつあります。LEDの利用や半導体工場の無菌室の活用などにより、2014年には人工光型工場は国内約170カ所で開催。平成26年5月1日施行の「農山漁村再生可能エネルギー法」の活用などにより農への再生エネルギーの導入も進められています。

農は命を支える産業です。心豊かな生活の実現に向けて、ぜひ農を採り入れたライフスタイルの新たなカタチを模索していただければと思います。

2. 日野農業の現状と
課題について

明石 幹生氏

JA 東京みなみ
日野七生地区指導経済課
課長

日野市で農業を営む農家は平成22年現在348戸。うち282戸が農業のほかに仕事を持つ兼業農家です。耕地面積は193haで、住宅地などへの転用により年々減少しています。

生産品の80%が学校給食や農産物直売所へ出荷されています。主要品目は野菜（トマトや大根、ジャガイモなど）、果物（梨やぶどう、ブルーベリーなど）、畜産（タマゴや牛乳など）です。水稲や花卉の栽培も行われています。

学校給食では、日野農産物の利用率25%（平成23年度）が目標とされています。野菜の供給システムにも特徴があり、農家と栄養士をつないでそれぞれの要望や生産状況を伝えるコーディネーターを設置しています。

また、農業者の高齢化に伴う人手不足への支援として「援農市民養成講座『農の学校』」を日野市が平成16年度に開校。ここで農業の基礎を習得した市民をボランティアとして農家に派遣しています。市民が農に触れるとともに農業者の収益確保や農地保全にもつながるものとして、体験型農園が3園展開されています。

JA 東京みなみでは、「安心して農業のできる環境づくり」「農業の担い手と仲間づくり」「市民と農家との交流・体験づくり」を日野市農業の今後の課題として捉えています。また、気候変動の影響が顕著な昨今、天候への対応をどうしていくかも課題となっています。

3. 地域の農業で生きる



小林 和男氏

JA 東京みなみ
野菜部会連絡協議会 顧問

私は日野市平山で農業を営み、学校給食に出荷しているジャガイモを始め、ネギやショウガ、トマト、キュウリなどを生産しています。地域の皆さまに農業の味方になっていただけるよう、15、6年ほど前から子どもを対象に、田畑の種まきから収穫、わらの活用まで一貫した農作業体験の場も提供しています。

日野産大豆プロジェクトにも参加しています。これは、国産で遺伝子組み換えのない安全安心な大豆製品を子どもたちに食べさせたい、という栄養士さんの想いから始まったもので、実践女子大学にもご協力をいただきました。2000平米の畑で大豆

を生産し、豆腐やおからをつくって学校給食で提供しました。「畑の景観に心が癒される」と地域から声が寄せられたことにも喜びを感じました。

これからの都市農業は、地域の方々に魅力を感じていただく「魅せる農業」を目指す必要があると考え、体験農園も開設しました。多くの方がここで汗を流し、農業について理解を深めてくださっています。

こうした取り組みも、「農を生かした新たな都市型ライフスタイル」を考える際にヒントになるのではないかと考え、今回ご紹介させていただきました。

グループディスカッション (ワールドカフェ)

参加者が少人数のグループに分かれ、カフェのようにリラックスした雰囲気の中でディスカッション。自由に意見を出し合い、農と都市型ライフスタイルの融合に向けたアイデアをテーブルごとに取りまとめました。



▲学生と地域住民の方が1つのテーブルに集い、それぞれの考えにじっくりと耳を傾けながら話し合いました。



▲どのグループでも参加者が積極的に意見交換。とことんまで笑い声も聞こえ、会場には活気があふれました。



▲アイデアをポストイットに記入。これらは最後に集約され、グループごとにとまとめた資料が参加者に配布されました。

対話から生まれたアイデア

※一部抜粋

- 農作業着や市場など、農業に関わるものに「おしゃれ」を採り入れる
- ジューススタンドを設置する
- 気軽・身近に農業体験できる場を創造する
- 野菜をプランターで栽培するスタイルの普及を図る
- 生産から食べるところまで体験できる農業テーマパークを開設する
- 農地付きマンションを建設する

パネルディスカッション (フィッシュボウルダイアログ)

ワールドカフェを踏まえ、生活科学部の教員とゲストがディスカッション。参加者は車座になり、その様子を金魚鉢(フィッシュボウル)に見立てて見守りました。またワールドカフェにおけるグループの代表者も意見を述べました。

進行：野津 喬氏(本学教員) 参加者：三善 浩二氏、明石 幹生氏、小林 和男氏(ゲスト)
犬塚 潤一郎氏、富田 洋三氏、須賀 由紀子氏、菅野 元行氏(本学教員)



ゲストの話を聞き、ワールドカフェに参加しての感想

明石 「若い人たちに農に参加してもらうためにはファッションが重要」という発想は、自分たちにはないもので新鮮だった。

犬塚 農業をビジネスととらえると採算性や後継者などの問題に囚われるが、人間らしい生き方をするための方策だと考えると視野が広がる。考え方を転換する時期に来ている。

富田 日本農業の大きな問題点は、多くの人の食を生産する場である農地が個人の所有物になっていること。この点を考えなければ、今後の農業の発展、また地域住民との協働も進まないのではないか。

ワールドカフェから生まれたアイデア

1. 「農のファッション」について

グループ7 私は日野で農地を借りて農作業をしているが、機能的でおしゃれな作業着がない。実践女子大学の学生が製作してはどうか。

小林 現在、ファッション性が高く動きやすい農作業着がいろいろと登場しているようだ。

須賀 インターネットなどで見かけることはあるが、土などで汚れる農作業に使うものとしては少々高価な点が気になる。

犬塚 ファッションアイテムはそのもの自体ではなく、それが表すものに価値がある。従って「農とファッション」についてもアイテムだけの問題ではなく、「農」自体が格好良く面白いものであるという価値観の確立を社会的に図る必要があると思う。

三善 山形県村山市では、9人の女性が集まりおしゃべりにもこだわって農業を行う「山形ガールズ農場」の取り組みが進んでいる。

グループ9 農業におしゃれな要素を採り入れて

は？ 例えば直売所も「マルシェ」と名付けてみてはどうだろうか。

小林 おしゃれさや格好良さはこれからどんどん採り入れていきたい。マルシェという呼び方に合わせて、野菜・果物の個売りなど、売り方もおしゃれにしたら面白い。

2. 「農業体験」について

須賀 地域住民が農に関われるよう、最初の一步につながる仕組みを作ることが重要。農業体験がそれに役立つのではないかと。

三善 農林水産省でもさまざまな施策を通じて農業公園や農業体験の推進を支援している。

参加者 都市のちょっとした空間を農地やガーデンとして活用する「コミュニティガーデン」を設置する方法もある。

グループ1 農業体験をしても、都市生活の中では活動を継続できない。ベランダや屋上での野菜のプランター栽培など、日常のかつ気軽にできる取り組みを広げることも大切だと思う。

明石 地域の方が農に触れる機会が少ないことは実感している。解決策の一つとして、プランターで夏野菜を作るなどの講習会をJAでも開いている。

グループ10 宿泊できる市民農園を開設してはどうか。また、農園をめぐるツアーを組むというアイデアも出された。

最後に

明石 農を取り巻く状況は今後も激しく変化していくだろう。より良い農業を展開していくためにも、ぜひ多くの方に農への理解を深め、応援していただきたい。

菅野 コミュニティガーデンは二酸化炭素の固定化にもつながる。環境にも良い取り組みだと思う。

犬塚 研究者の間では、気候変動は今後も続くことが通説になっている。それに伴い、これまで利用さ

れてきた設備が通用しなくなるなど農業も変革を強いられるだろう。化石燃料の枯渇によってトラクターも使えなくなるかもしれない。農業は今大きなターニングポイントを迎えていることを認識する必要がある。

富田 1haの土地で農作物を作るかマンションを建てるかで収益がまったく違う。しかし、食物は私たちに欠かせないものだ。これからの生活を模索する時、こうしたことも考えていく必要がある。

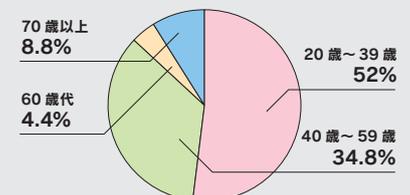
三善 農業はまさに「人間らしい生き方」を象徴するもの。学生をはじめ多くの方に、農を意識し暮らしに採り入れてもらいたい。

小林 日野で「田園都市」を実現したい。都市型ライフスタイルと農地を共存させ、作物や環境など、農の恵みを地域に還元していけたらと思っている。

公開講座アンケートより

- 実際に農に取り組んでいる方々の意見を聞き、幅広い視点に触れることができ、とても良い機会となった。(10歳代/女性)
- 農林水産省、JA、農業者、学識経験者、学生、市民と多様な人々が集い、語りやすい雰囲気の中で有意義なディスカッションができた。(50歳代/男性)
- 日野市の農業が思った以上に廃れていることに気づいた。農業を推進する運動を展開するべきだと思った。(60歳代/女性)

参加者の属性(年齢別)



全体総括



犬塚 潤一郎氏
実践女子大学 生活科学部
現代生活学科 教授

「お金が何より大切」という価値観が私たちの中に根付いている限り、農業の未来は広がらず、人間自体も悲惨な未来を迎えることになるでしょう。それを認識し、経済的な豊かさを至上のものとする価値観から脱却しようと自らの考え方を鍛えることが、人間らしい暮らしにつながると思います。学生の皆さんには、学生時代をそのための時間として活用していただきたいですね。